

mizuki

みずき
第17号



大阪医科大学附属病院 病院医療相談部 医療連携室ニュース ● 2010年10月発行

contents

- 診療科の紹介「一般・乳腺・内分泌外科」…P.2
- 診療科の紹介「放射線科」……………P.3
- 医療連携室から……………P.4
- 編集後記……………P.4



診療科の紹介 ● 一般・乳腺・内分泌外科



一般・乳腺・内分泌外科 科長
平松 昌子

当科で扱う疾患は、主に一般外科領域と乳腺外科領域に分かれ、特に一般外科で取り扱う疾患はきわめて多岐にわたります。鼠径ヘルニア・腹壁癭痕ヘルニアの手術は年間約100例行っており、そのほとんどをメッシュ法で修復していますが、最近では異物感の少ないメッシュや半吸収性の素材も取り入れて、できるだけ術後の違和感や過度の癭痕化をきたさないよう工夫しています。患者様の希望が多くないため現在のところ日帰り手術は行っており、傷の痛みが癒えた術後2-3日目に退院していただいています。その他体表および腹腔内・後腹膜腔等の消化管由来以外の腫瘍性・炎症性疾患を幅広く取り扱っています。血管外科は現在では主として静脈疾患のみの診療に限っており、下肢静脈瘤の硬化療法を積極的に行っています。

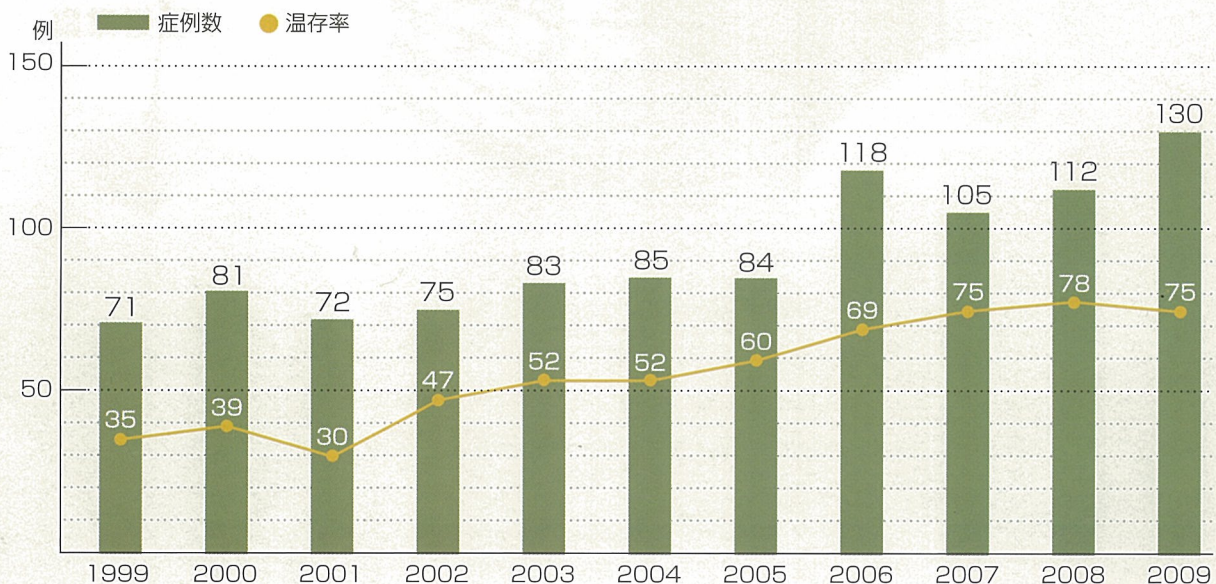
乳腺外科では乳腺疾患の診断と乳癌の治療にあたっていますが、近年食生活の欧米化などに伴い、乳腺疾患は増加の一途をたどっています。診断は良悪性の鑑別のみならず、組織型や病巣の拡がり、リンパ節転移の有無など、正確な診断を行った上でEBM (Evidence Based Medicine) に基づいた的確な治療を行うことが重要です。受診当日にはまず認定資格を持った技師がマンモグラフィーを撮影し、乳腺専門医が読影を行います。悪性の疑いのある場合は速やかに超音波検査・細胞診検査を行います。一般の穿刺細胞診に加えて、さらに大きな組織片を採取できるマンモトーム生検も導入しています。また放射線科と協力し、3D-CTやMRIを駆使して病巣の拡がりやリンパ節転移の

診断の正診率を向上させています。手術に関してはQOLを重視した術式の選択と、早期乳癌に対するセンチネルリンパ節生検を積極的に導入し、現在では7割以上の患者様に乳房温存手術を行っています。進行癌に対しても乳房温存手術を可能にするべく、術前の化学療法・内分泌療法を駆使して腫瘍の縮小をはかたり、形成外科と連携した乳房再建術など、患者様のニーズにお応えできるように努めています。進行癌や再発症例に対しては術後化学療法やホルモン療法を行いますが、外来化学療法センターにてより安全でできるだけ快適に治療を受けていただけるように配慮しています。これら診断から術前治療、手術、術後治療までを週4回の乳腺専門外来日(予約制)を中心に、一貫して乳腺専門医が当たっており、また医師・病理医・看護師・薬剤師・理学療法士を含む合同カンファレンスを定期的に行うなど、チーム医療を強化しています。

乳癌入院手術例(2008年11月～2009年10月)

乳管葉区域切除術	8例	6.2%
乳房円状部分切除術	86例	66.2%
乳房扇状部分切除術	4例	3.1%
胸筋温存乳房切除術(皮下乳腺全摘出含む)	32例	24.6%
	130例	100%

乳癌手術症例数の変遷(1999～2009年)





放射線科は診断から治療まで 総合的に診療に取り組んでいます

放射線科 科長
鳴海 善文

放射線科は診断部門、IVR部門と放射線治療部門に分かれます。

診断部門はほとんどすべての臓器を対象とし、各診療科の診療を織物の縦糸にたとえるなら横断的な診療を行うので横糸にたとえることが出来ます。各臓器の悪性腫瘍では原疾患の質的診断、進捗診断はもとより、再発の診断をCT、MRI、核医学などを用いて行っています。診断部門では平成21年度はCT4台(64列:3台、320列:1台)で年間27,323件、MRI3台(1.5T:2台、3T:1台)で9,994件、核医学検査3,174件を行っています。320列CTは冠動脈病変や脳血管病変の診断に有用で、診断のための血管造影が非侵襲的なCT angiographyに置き換わりつつあります。3テスラMRIは頭頸部、脳神経領域、乳腺、骨盤領域の診断に有用で、diffusion tensor imagingによる神経の走行と病変の関係の可視化が可能です。

IVR部門は婦人科、泌尿器科の骨盤悪性腫瘍に対するBOAI(Balloon occluded arterial infusion)、中心静脈ポート留置術、気管支動脈塞栓術、門脈圧亢進症による静脈瘤に対するB-RTO(バルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術)、整形外科領域の塞栓術、前置癒着に対する術前総腸骨動脈バルーン留置術、消化管や腹腔内出血に対する塞栓術など緊急止血症例を含め、各診療科からの依頼で年間約200症例のIVRを施行しています。

放射線治療部門では、放射線治療を全身のほとんどすべての悪性腫瘍に対して行われています。近年では放射線治療は根治を目的として行われる場合が多くなりました。当院では主に脳腫瘍、頭頸部腫瘍、乳癌、肺癌、前立腺癌、膀胱癌、子宮頸癌などに対して放射線治療を行っています。これら以外にも緩和を目的として多くの患者様が転移性脳腫瘍や転移性骨腫瘍に対する放射線治療を受けています。転移性脳腫瘍についてはライナックによる定位放射線治療も行っており、ガンマナイフと同等の良好な治療効果を得ています。

昨今、高齢化社会と食生活の欧米化を反映して前立腺癌が非常に勢いで増えています。当院では特に前立腺癌の放射線治療に力を入れており粒子線治療以外のすべての放射線治療、すなわち通常行われている外部照射による4門照射は言うに及ばず、強度変調放射線治療(IMRT)、密封小線源治療(一時刺入法と永久刺入法)を行っています。これにより患者様一人ひとりの病状に応じたきめ細かな治療が可能となっています。放射線治療の最大の特長は治療後に快適な生活を送ることが出来ることにあります。問題となることの多い尿失禁が放射線治療ではいずれの方法でも2-3%以下です。前立腺癌で放射線治療を受けられる患者様のほとんどはPSA健診にて異常を指摘された方々で、その多くは放射線治療にて再発なく元気に過ごされています。

以上、放射線診断、IVRから放射線治療までの幅広い分野で各診療科をまたがる機能をもつ放射線科の取り組みについて述べさせて頂きました。各分野に専門性のある担当医がおりますので医療連携室を通して予約をお取り頂きますようお願い申し上げます。



3TMRI



医局集合写真

医療連携室から

●第7回 四医師会大阪医科大学医療連携の会 開催報告

去る7月17日(土)に「第7回 四医師会大阪医科大学医療連携の会」がホテルグランヴィア大阪で開催されました。講演会では耳鼻咽喉科科長 河田了先生が「甲状腺腫瘍の診断と治療」、循環器内科科長 石坂 信和 先生が「加齢とともに増加する循環器疾患」と題して講演されました。

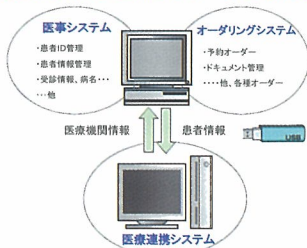
その後の懇親会でも、和やかな雰囲気の中、活発な交流が行われました。100名以上にご参加をいただき、盛況のうちに終了することができました。



●第12回日本医療マネジメント学会学術総会 発表報告

6月11日(金)、12日(土)札幌で開催された第12回日本医療マネジメント学会学術総会において、医療連携室 竹島が、発表を行いました。「医療連携システム～医療連携室での取り組み～」と題して、連携システムを用いた外来紹介患者様のFAXによる受診報告についてお話しさせていただきました。大勢の方々にお聞きいただき、質問や貴重なご意見をいただきました。

当院のシステムについての概要



医療連携システム



- 初診紹介申込の予約確認票FAX
- 紹介・逆紹介情報管理
- 返書管理・各種印刷(返書用封筒の宛名など)
- 外来紹介患者のFAXによる受診報告
- 医療機関情報管理
- 会議管理
- 統計・資料作成、…他



編集後記

早いもので、「みずき」を発行して丸5年が経過しました。今号は17号になりますが、創刊号からは少しはスマートになり進化したかなと自画自賛しております。

平成22年も残すところ、2ヶ月余りとなりました。今号が出るころにはプロ野球のペナントレースも終末を迎え、我が阪神タイガースがクライマックスシリーズで奮闘していれば嬉しいのですが。一方、横揺れが収まらない政局の混迷は留まることを知らず、国政のトップが短期間で交代が続くという現状は、諸外国から見ると余りにも情けない状況です。国民を守るべき政治が何処へ行くのか全く見えてきません。

本院は今年度6月28日から30日の3日間に日本医療機能評価機構による病院機能評価(Ver6.0)を受審しました。その結果についての通知も届いており、認定証が届くか気になるところです。サーベイヤーの先生方からは医療連携室について高い評価を頂きましたが、足りない部分も多々あると自覚しておりますので、今後も引き続き地域の先生方のご意見を伺いながら、お役に立てるよう努力する所存です。

(T.S)